

富沢遺跡

第149次発掘調査報告書

2017年1月

仙台市教育委員会

富沢遺跡

第149次発掘調査報告書

2017年1月

仙台市教育委員会

序 文

仙台市の文化財保護行政に、日ごろからご理解、ご協力を賜り、心から感謝申し上げます。仙台市内には、旧石器時代から近世に至るまでの780か所以上の埋蔵文化財が残されております。当教育委員会といたしましては、市民の皆様からのご理解・ご協力のもと、貴重な文化財の保護・保存を図りながら活用し、後世へ継承していく様に努めているところです。

富沢遺跡は仙台市南東部の太白区富沢、長町南、泉崎、鹿野等に広がる面積約90haにおよぶ遺跡です。この地域は、土地区画整理事業を契機に開発が進み、その後の仙台市営地下鉄南北線の開通によって、仙台市南部の拠点となりました。これまで富沢遺跡では149次を数える調査が行われ、旧石器時代から近世にかけて、人々の生活の痕跡が残されていることが明らかになっています。なかでも、第30次発掘調査の旧石器時代の調査成果は、遺跡を保存し、現地での展示・公開を行う「富沢遺跡保存館—地底の森ミュージアム—」の建設へと当初の計画の変更がはかられました。仙台市富沢遺跡保存館は平成8年11月の開館以来、当時の自然環境と人々の生活をよみがえらせる展示とともに、様々な普及活動を行っています。

本報告書は共同住宅建設工事に伴い、平成28年度に実施しました富沢遺跡第149次発掘調査の成果をまとめたものです。本報告書が学術研究はもとより、市民の皆様への普及活動に広く活用され、文化財に対するご理解と関心を抱く一助となれば幸いに存じます。

最後になりましたが、仙台市では、平成23年3月11日の東日本大震災から6年が経とうとする今も復興に向けた事業が進められています。そうしたなか、発掘調査および調査報告書の刊行にあたり、多大のご協力、ご助言を賜りました多くの方々に対しまして深く感謝申し上げる次第です。

平成29年1月

仙台市教育委員会
教育長 大越 裕光

例　言

1. 本書は、共同住宅の建設に伴う富沢遺跡第149次発掘調査の報告書である。
2. 発掘調査は、仙台市教育委員会の委託を受け、株式会社イビソクが行った。
3. 本書の作成・編集は、仙台市教育委員会生涯学習部文化財課 佐藤淳・小泉博明の監理のもと、株式会社イビソク 堀正樹・山崎貴之が行った。本書の執筆分担は以下のとおりである。
小泉博明 第1章 第1・2節
堀 正樹 第3章 第2節、第4章 第4～8節、第5章
山崎貴之 第2章、第3章第1節、第4章第1～3節
4. 整理作業・報告書作成は、株式会社イビソク仙台支店にて行った。
5. 本調査に関わる一切の資料は仙台市教育委員会が保管している。

凡　例

1. 本報告書の土色については、「新版標準土色帖（2002年版）」（小山・竹原：2002）に準拠している。
2. 第1～4図で使用した各図の原図の出典については各挿図に記載した。
3. 図中の座標値は、世界測地系（2011）の平面直角座標系に準拠している。
4. 挿図で使用した方位は全て座標北で統一している。
5. 標高値は、東京湾平均海面高度（T.P.）を示している。
6. 揿図の縮尺は平面図：1/150・1/100、断面図：1/40を基本としたが、スケール下にその都度示した。
7. 揿図で使用したトーン等の凡例は図中に示した。
8. 本文中の「擬似畦畔A」は水田の畦畔直上に認められる自然堆積層上面の高まりを、また「擬似畦畔B」は水田の畦畔直下に認められる自然堆積層上面の高まりを示している。（仙台市教育委員会：1987）
9. 本文中の灰白色火山灰（庄子・山田：1980）は、これまでの仙台市域の調査報告や東北中北部の研究から、「十和田火山灰（To-a）」と考えられている（古環境研究所：1990）。降下年代は西暦915年と推定されており、本書もこれに従う。

本文目次

序文

例言・凡例

第1章 はじめに

第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査要項	1

第2章 遺跡の概要

第1節 地理的環境	2
第2節 歴史的環境	3

第3章 調査の概要

第1節 調査の方法と経過	6
第2節 基本層序	7

第4章 検出遺構と出土遺物

第1節 2層	14
第2節 3a・3b層上面	14
第3節 4層上面	14
第4節 9層上面	15
第5節 10層上面	16
第6節 23層	16
第7節 24層以下	16
第8節 出土遺物	17
第5章 まとめ	18

引用・参考文献

写真図版

報告書抄録

挿図目次

第1図	富沢遺跡第149次発掘調査区位置図	1
第2図	名取川下流域の微地形分類図	2
第3図	富沢遺跡周辺の遺跡分布図	4
第4図	富沢遺跡調査区位置図	5
第5図	調査区グリッド配置図	6
第6図	調査区西壁・北壁土層柱状図	7
第7図	調査区北壁土層断面図	9
第8図	調査区南壁・東壁土層断面図	11
第9図	調査区西壁土層断面図	13
第10図	3a・3b層上面平面図 SD1断面図	14
第11図	4層上面平面図 SD2・3断面図	15
第12図	9層上面平面図 SD4断面図	15
第13図	10層上面平面図 SD5断面図	16
第14図	23層下面平面図	16
第15図	出土遺物実測図	17

挿表目次

第1表	基本層序土層注記表	8
-----	-----------	---

写真図版

- 図版1 1 調査区北側壁面（南西から）
2 調査区全景（東から）
3 SD1完掘状況（北から）
4 4層上面完掘状況（北東から）
5 9層上面完掘状況（西から）
- 図版2 1 10層上面完掘状況（東から）
2 23層磨石出土状況（北から）
3 下層掘削状況（南西から）
4 下層西側壁面状況（東から）
5 出土遺物

第1章 はじめに

第1節 調査に至る経緯

富沢遺跡第149次発掘調査は、富沢遺跡内で計画された共同住宅建設に伴う埋蔵文化財の事前調査である。平成28年4月21日付で、大和ハウス工業株式会社より、富沢遺跡内の仙台市太白区長町南3丁目6-1において、共同住宅建設の協議書が提出された。仙台市教育委員会では、本工事が杭基礎工事を伴うことから、富沢遺跡の地下構造が損なわれると判断し、共同住宅建設工事に先立ち本発掘調査を必要とする旨の回答文を平成28年5月2日付H28教生文第103-005号で送付した。その後、大和ハウス工業株式会社と協議を行い、記録保存を図るために本発掘調査を実施することになった。

第2節 調査要項

遺跡名：富沢遺跡（宮城県遺跡登録番号：01369 仙台市文化財登録番号：C-301）

所在地：宮城県仙台市太白区長町南3丁目6-1

調査主体：仙台市教育委員会

調査担当：仙台市教育委員会 文化財課調査指導係 主査 佐藤 淳、主事 小泉 博明

調査組織：株式会社イビソク 調査員 鈴木 裕子（平成28年8月～9月）、堤 正樹（平成28年9月～10月）

調査補助員 山崎 貴之、計測員 三浦 康和

調査期間：野外作業 平成28年8月25日～平成28年10月29日

調査面積：154m²

整理期間：平成28年10月30日～平成29年1月31日

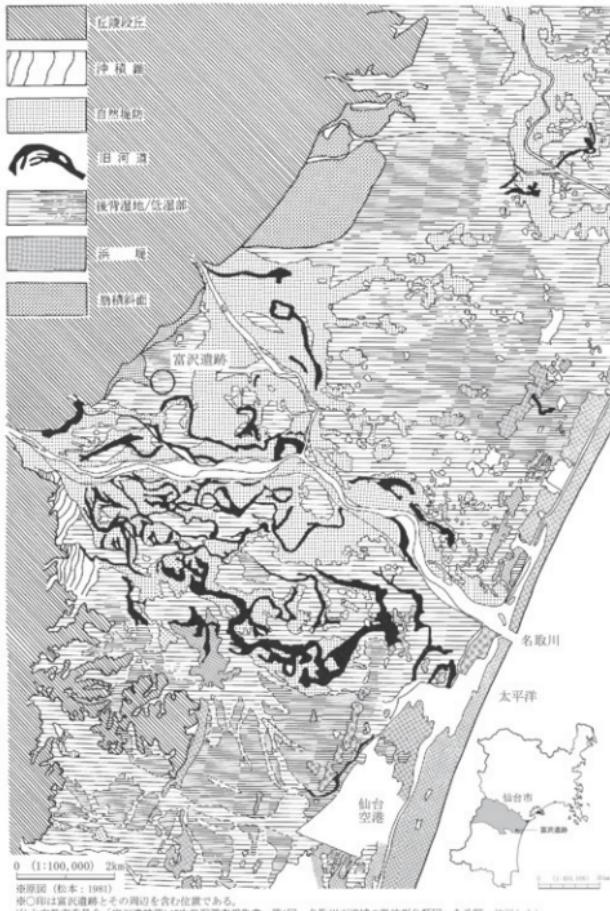


第1図 富沢遺跡第149次発掘調査区位置図

第2章 遺跡の概要

第1節 地理的環境

富沢遺跡は、仙台市南東部の富沢・泉崎・鹿野・長町南他に位置する。総面積は約90haに及び、旧石器時代～近世にわたって営まれた複合遺跡である。遺跡の南を名取川、北東を広瀬川が流れ、その両岸には開析された土砂の堆積により形成された自然堤防が発達している。北西の丘陵から平野部に流れ込む名取川下流域は、扇状地性の沖積平野を形成する。富沢遺跡は広瀬川の堆積作用によって形成された自然堤防と、太白山村付近から流れる荒川の



自然堤防に囲まれた後背湿地に立地する。この後背湿地は、名取川、広瀬川由来の堆積物を基盤層としている。

当地は、旧石器時代にはマツ属、モミ属、トウヒ属などの亜寒帯性の針葉樹林帯を形成していた。弥生時代以降は、湿润な環境を利用した水田が重層的に営まれることとなる。昭和50年代の土地整理事業に伴い1～2mの盛土がなされたが、区画整理以前の旧地形は、北西から南東方向に緩やかに傾斜する後背湿地で標高は約9m～16mであった。

第2図 名取川下流域の微地形分類図

第2節 歴史的環境

旧石器時代 富沢遺跡の位置する名取川流域では、山田上ノ台遺跡から約2万年前の後期旧石器時代と推定されるナイフ形石器、石核、剥片が出土している。富沢遺跡においても、本調査区の西側に位置する第30次発掘調査区では、樹木遺体や動物の骨等の遺物が出土しているほか、埋没林とともに、石器が埋納されたビット状構造と焚火跡が検出され、小規模なキャンプの痕跡が確認されている。埋没林はマツ、トウヒなどの針葉樹林を中心で、旧石器時代から周囲を河川に囲まれた湿地のような土地であったと推定されている。

縄文時代 当該時期の遺跡は、仙台市内では下ノ内浦遺跡（15）や三神峯遺跡（40）などが知られている。富沢遺跡に隣接する下ノ内浦遺跡は、名取川と笊川の堆積により形成された自然堤防上に立地し、標高約9mの層から、早期前葉の押型文土器、堅穴遺構2基と土坑7基が検出されている。三神峯丘陵上に立地する三神峯遺跡は、丘陵上から前期初頭の大木1式～2b式期の土器や石器と共に堅穴住居跡が8軒検出され、丘陵のほぼ全域に遺物、遺構が広がることから、大規模集落が想定される。六反田遺跡（9）では中期中頃～中期末頃の大木8b式～10式期の堅穴住居跡や埋設土器、後期初頭を中心とした堅穴住居跡10数軒が検出されている。縄文時代の後半になると台地や丘陵部から低地への進出が加速し、遺跡の分布がより拡大していく。

弥生時代 富沢遺跡周辺では弥生時代になると、名取川や広瀬川流域の自然堤防沿いに立地する遺跡が増加する傾向がみられ、このことは水田耕作により適した低地に集落が形成された結果と考えられる。富沢遺跡の東側には西台畠遺跡（58）が位置し、中期の土壤墓と土器棺墓が確認されている。後期の遺跡には、土壤墓が検出された下ノ内浦遺跡や水田跡が検出された山口遺跡（17）などがある。

古墳時代 仙台地方では4世紀頃から大規模な古墳の造営が始まり、富沢遺跡周辺においても三神峯古墳群（42）や金岡八幡古墳（31）、教塚古墳（20）などが築造された。三神峯丘陵を中心に富沢窓跡（43）、金山窓跡（41）、土手内窓跡（37）では埴輪や須恵器の生産が行われ、三神峯古墳群や教塚古墳の墳丘周辺からは、富沢窓跡で生産されたと考えられる円筒埴輪片が出土している。古墳時代終末期の7世紀になると、土手内横穴墓群（38）や向山横穴墓群のような丘陵斜面を利用した横穴墓が増加する。また、7世紀後半になると富沢遺跡の東側に位置する郡山遺跡（57）に官衙が造営される。

奈良・平安時代 当該期は低地周辺の遺跡から集落跡や水田跡が検出されている。富沢遺跡周辺では長町駅東遺跡（59）や山口遺跡が挙げられる。長町駅東遺跡からは堅穴住居跡が300軒以上検出され、溝や木材場による区画施設が確認されている。山口遺跡からは堅穴住居跡6軒、後背湿地に水田跡22枚が検出され、水田は溝を境に真北方向を基準とした区割りが確認されており、同様の区割りは富沢遺跡における調査でも確認されている。

中世 中世になると低地を中心城館や屋敷が築造され、富沢遺跡周辺には王ノ壇遺跡（18）、富沢館跡（51）が立地している。王ノ壇遺跡は鎌倉時代の武士層の屋敷跡とされ、火葬墓、土葬墓などが検出されている。富沢館跡は名取川北岸の低地に築かれた城館跡である。富沢遺跡では、第15次発掘調査で13世紀～17世紀初頭の屋敷跡や水田跡、第77次発掘調査で鳥帽子や木簡などが出土している。

近世 仙台城の城下周辺はその大半が、田畠や荒地といった農村地帯であった。富沢遺跡は富沢村と平岡村に跨がっており、文政年間に作成された絵図には宿の周辺に町並みや家並みが存在したが、家の軒数は少なく周辺一帯に田畠が広がるのみであった。明治時代以降の地図でもその様相はほとんど変わらず、近世を通して同じような環境であったと考えられている。

近代以降 近代以降も富沢遺跡周辺の環境に変化は少なく、市町村制施行により行政区画の変更がなされたのみであった。戦後は丘陵部の宅地造成が始まり、昭和30年代になると丘陵部や低地一帯が住宅地となった。昭和50年以降は土地区画整理事業の対象としてそれまで水田地帯であった富沢遺跡周辺も盛土がなされ、現在では住宅街として急速な勢いで都市化が進んでいる。

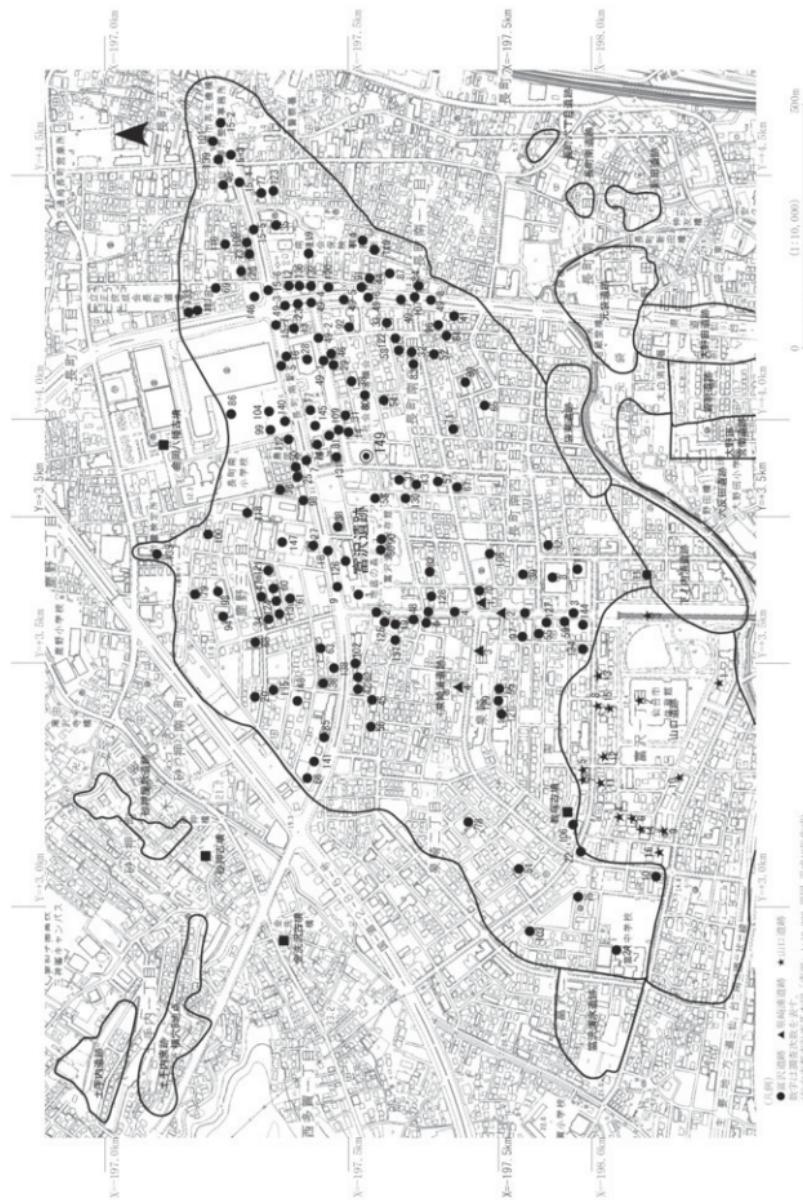


国土土地理院発行「1/250,000地図 東北本線沿線部・仙台東南部」を複製・使用した

1/25,000 0 500

番号	遺跡名	立地	種別	時代	番号	遺跡名	立地	種別	時代
1	山川古墳	霞ヶ原湿地	集落跡・水田跡・散布地	旧石器～近世	33	古墳	丘陵	古墳	古墳
2	伊古内道遺跡	自然現跡	緩傾地	平安	34	砂利屋敷遺跡	段丘	集落跡	奈良～平安
3	下ノ内道遺跡	自然現跡	集落跡	礎文(中)～廃	35	砂利古墳	丘陵	古墳	古墳
4	大野田古墳群	自然現跡	古墳・集落跡	礎文(中)世	36	土手内道跡	丘陵	集落跡・生糞道路	礎文～古墳
5	上ノ内道跡	自然現跡	古墳	古墳	37	下ノ内道・新田跡	丘陵斜面	実跡・植穴墓	古墳・奈良
6	春日井古墳	自然現跡	古墳	古墳	38	土手内道着生地	丘陵斜面	做穴墓	古墳
7	鳥居塚古墳	自然現跡	古墳	古墳	39	新ノ内道	丘陵	集落跡	平安
8	大野田官道跡	自然現跡	官道跡	古墳～奈良	40	神等進跡	段丘	集落跡	礎文
9	六反坂古墳	自然現跡	集落跡	礎文(中)～廃	41	寺山古墳	段丘	実跡	古墳
10	安榮古墳	自然現跡	集落跡	古墳・古墳	42	神等・猪群跡	段丘	古墳	古墳
11	五反坂大塚	自然現跡	古墳	古墳	43	宮刀宿跡	段丘	実跡	古墳～平安
12	五反坂石垣跡	自然現跡	集落跡	古墳	44	金沢沢古墳	丘陵	古墳	古墳
13	新田北町古墳	自然現跡	盆地	奈良～平安	45	西町古墳	段丘	集落跡	平安
14	伊古内古墳	自然現跡	集落跡	古墳	46	西町古墳	丘陵	古墳	古墳
15	下ノ内道遺跡	自然現跡	集落跡・慈路跡・水田跡	礎文(下)・前・後)～中世	47	原東進跡	段丘	活苔地	古墳
16	雲葉進跡	自然現跡	活苔地	奈良～平安	48	原進跡	段丘	集落跡・古墳	弥生～平安
17	山下1遺跡	自然現跡・古賀遺跡	集落跡・水田跡	礎文・平安	49	西町遺跡	段丘	実跡	奈良～平安
18	1ノ進跡	自然現跡	集落跡・屋敷跡	礎文(下)～中世	50	道引上ノ台道跡	段丘	耕作地	礎文・平安
19	原町浦遺跡	自然現跡・古賀遺跡	集落跡・水田跡・墓地	礎文(下)・弥生～古墳・平安	51	道引船跡	自然現跡・海岸堤防	船形跡	中～近世
20	西町古墳	自然現跡	古墳	古墳	52	道引屋敷古墳遺跡	自然現跡	集落跡・生糞道路	礎文・奈良～中世
21	云空進跡	自然現跡	集落跡・屋敷跡・水田跡	奈良～平安	53	道引屋敷古道跡	自然現跡	集落跡	礎文・奈良～中世
22	大野田古墳	自然現跡	集落跡	礎文(下)・古墳～平安	54	道引屋敷古道跡	自然現跡	集落跡・活苔地	奈良～中世
23	御星敷遺跡	自然現跡	集落跡・古墳跡・廃耕跡	近畿	55	新ノ内道跡	自然現跡・都市遺跡	活苔地	弥生・平安
24	自明六ノ内道跡	自然現跡	集落跡	奈良～平安	56	二木松遺跡	自然現跡	集落跡	平安
25	自明内道跡	自然現跡	集落跡	奈良～平安	57	郡山遺跡	自然現跡	官道開通・寺坂跡・集落跡	礎文・前・奈良～中世
26	新田宿跡	自然現跡	集落跡	奈良～平安	58	西台側遺跡	自然現跡	集落跡・古墳・墓地・貨幣跡	礎文・盛(牛)～古墳～近世
27	笠原古墳	自然現跡	集落跡	奈良～平安	59	足利原古墳	自然現跡・遺物	集落跡・水田跡	佐世～中世
28	自明古道跡	自然現跡	古墳跡	古墳	60	山城進跡	自然現跡	奈良～平安	
29	自明古道跡	自然現跡	集落跡	奈良～平安	61	道引進跡	自然現跡	集落跡	古墳・平安
30	下ノ内道跡	自然現跡	集落跡	古墳～平安	62	上野進跡	段丘	集落跡	礎文・奈良・平安・近世
31	金岡八幡古墳	自然現跡	古墳	古墳	63	田田南北遺跡	自然現跡	耕作地	奈良・平安
32	下ノ内道	丘陵	古墳	古墳					

第3図 富沢遺跡周辺の遺跡分布図



第4図 富沢遺跡調査区位置図

第3章 調査の概要

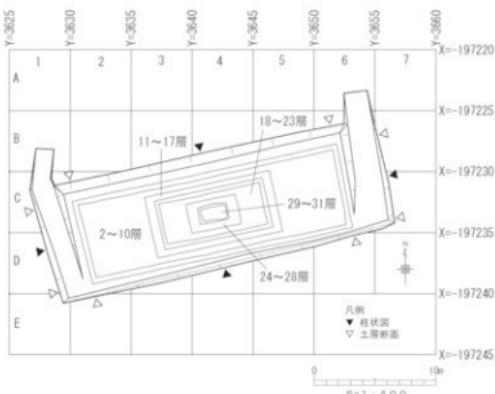
第1節 調査の方法と経過

調査対象地は仙台市太白区長町南3丁目6-1に所在する。近接する調査区は、富沢遺跡第131次発掘調査区が本区の北側、第14・104次発掘調査区が東側に位置する。本調査区は南北10.0m×東西28.0mとした。調査区の座標は、世界測地系（2011）を基準とし、基準点およびB.Mを設置し、測量はトータルステーションを使用した。写真撮影は、35mmモノクロフィルム・カラーリバーサルフィルム、デジタルカメラを用いて行った。調査区の北西隅（X=-197220.000, Y=+3625.000）を原点とし、5mグリッドを設定した。北西隅をA1グリッドとし、南北方向にA~E、東西方向に1~7のグリッド番号を付した。出土遺物は、グリッド単位で取り上げを行った。

野外調査は、平成28年8月25日から重機掘削を開始した。約1.3mの盛土及び現代の水田耕作土除去を行い、近世～近代の水田耕作土と推定される2層上面付近まで掘削した。掘削土運搬用のスロープを調査区東側及び西側に設け、9月2日から本格的な調査を開始した。土層観察及び排水用の側溝を先行して掘削し、2層から各層ごとに掘削・精査及び写真撮影・測量作業を行った。掘削方法は、スコップ等による掘削と、両刃鎌、ジョレンによる精査を適宜使い分けで行った。

近世～弥生時代の調査は、22.0m×7.0mの調査区を設定して調査を進めた。土層観察から2層、3層（3a層・3b層）、9層が水田土壤の可能性があることを確認した。9月5日から2層上面の検出を行い、その後2層の水田跡の確認調査を行ったが、畦畔は確認されなかった。遺物は18世紀～19世紀の陶磁器片が出土した。9月12日から3層の調査を開始し、土層観察の結果、植物遺体の分解の程度によって3a・3b層と細分した。3a・3b層はともに2層水田の耕作により擾拌されており、残存状況が不良であった。調査区西部で南北方向のSD1を検出したが、水田に伴う畦畔は確認されなかった。9月15日から4層の調査を始め、4層上面でSD2・3を検出した。いずれも掘削深度が浅く、遺物は確認されなかった。溝跡の調査終了後、擬似畦畔確認のための調査を行ったが、畦畔の痕跡は確認されなかった。9月21日から、弥生時代の水田耕作土と考えられる9層に向けての掘削を始めた。5層から

8層は自然堆積層と考えられ、上面で擬似畦畔Aを確認するため8層から精査を行ったが、畦畔は検出されなかった。8層の掘削後、9層上面の精査を行い、調査区西側でSD4を検出した。9層は水田耕作土の可能性が考えられ、畦畔検出のため慎重な掘り下げを行ったが、畦畔等の水田痕跡は確認されなかった。9層から10層にかけては、擬似畦畔Bの確認のため10層上面の精査を行った。調査区を東西に横断するSD5を検出したが、10層においても水田痕跡は確認されず、8～10層にかかる調査を終了した。10月14日からは調査区中央に9.0m×5.0mの深掘区を設定した。10月15日に縄文時代早期の遺物包含層に相当する23層まで掘削

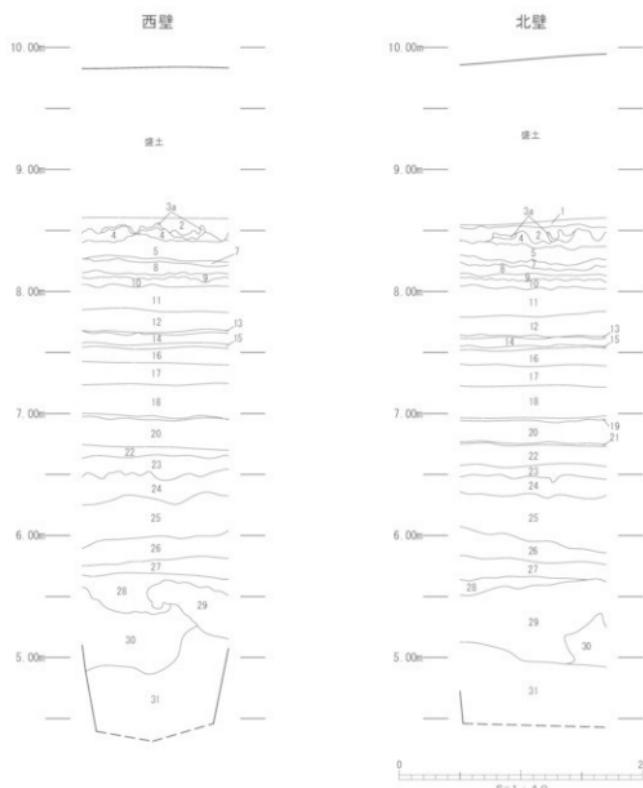


第5図 調査区グリッド配置図

し、精査の結果、遺構は確認されなかったが、23層から磨石が1点出土した。24層から下層は調査範囲を4.1m×2.4mに狭め、部分的に犬走りを設け、旧石器時代の腐食粘土層確認を主眼として調査を行った。下層は31層まで掘り進めたが、湧水が著しく、安全性を考慮して調査を終了した。周辺の調査区では、旧石器時代相当層が確認されているが、本調査区では確認することが出来なかった。10月27日以降は埋め戻しと資材撤収作業を行い、10月29日に野外調査を終了した。

第2節 基本層序

今回の調査では現地表から約5.5mまで掘削した。堆積する土層は、土質や色調、混入物の違いで細別し、現代の区画整理による盛土を除き、1～31層まで確認した。以下に特徴を概観する。

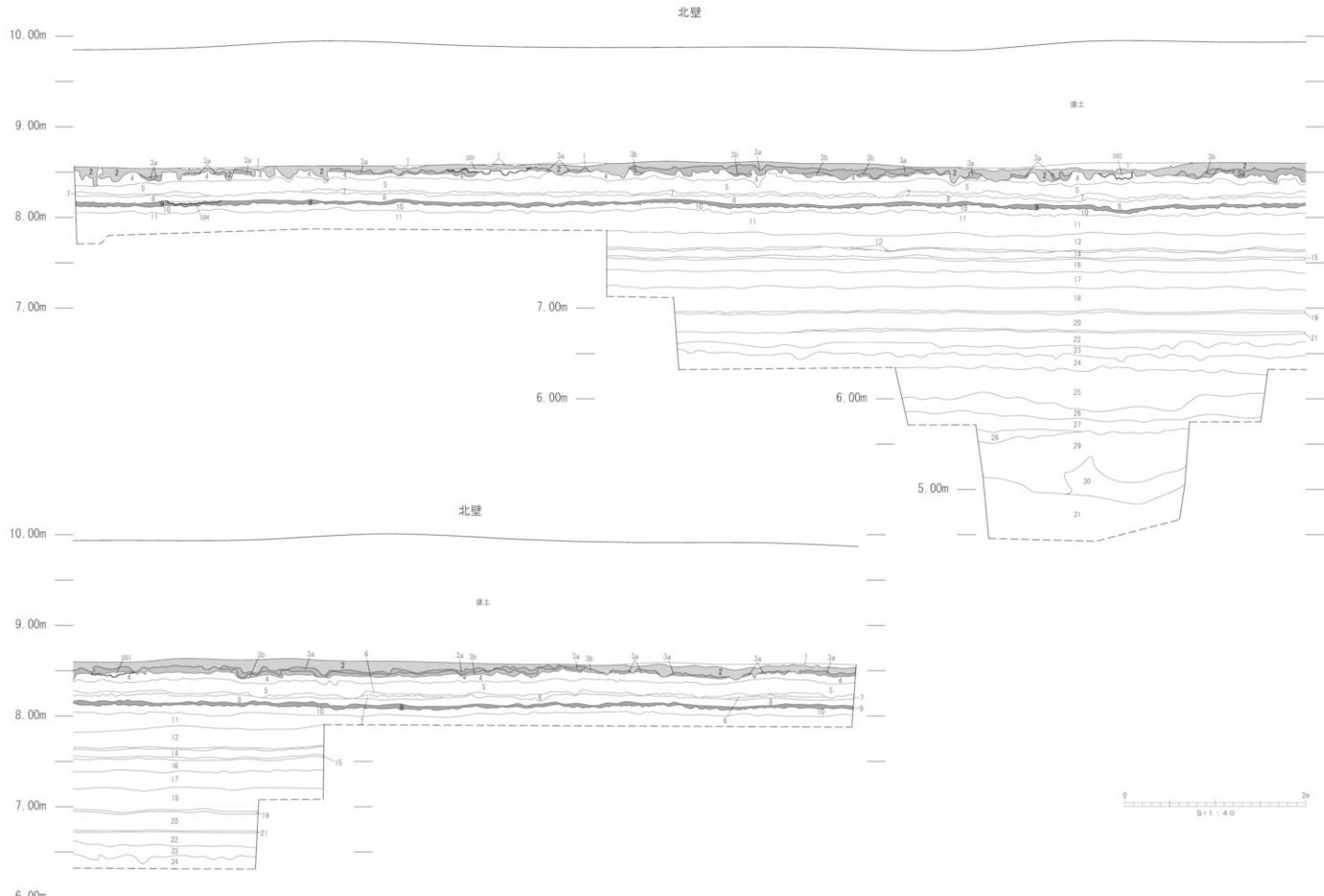


第6図 調査区西壁・北壁土層柱状図

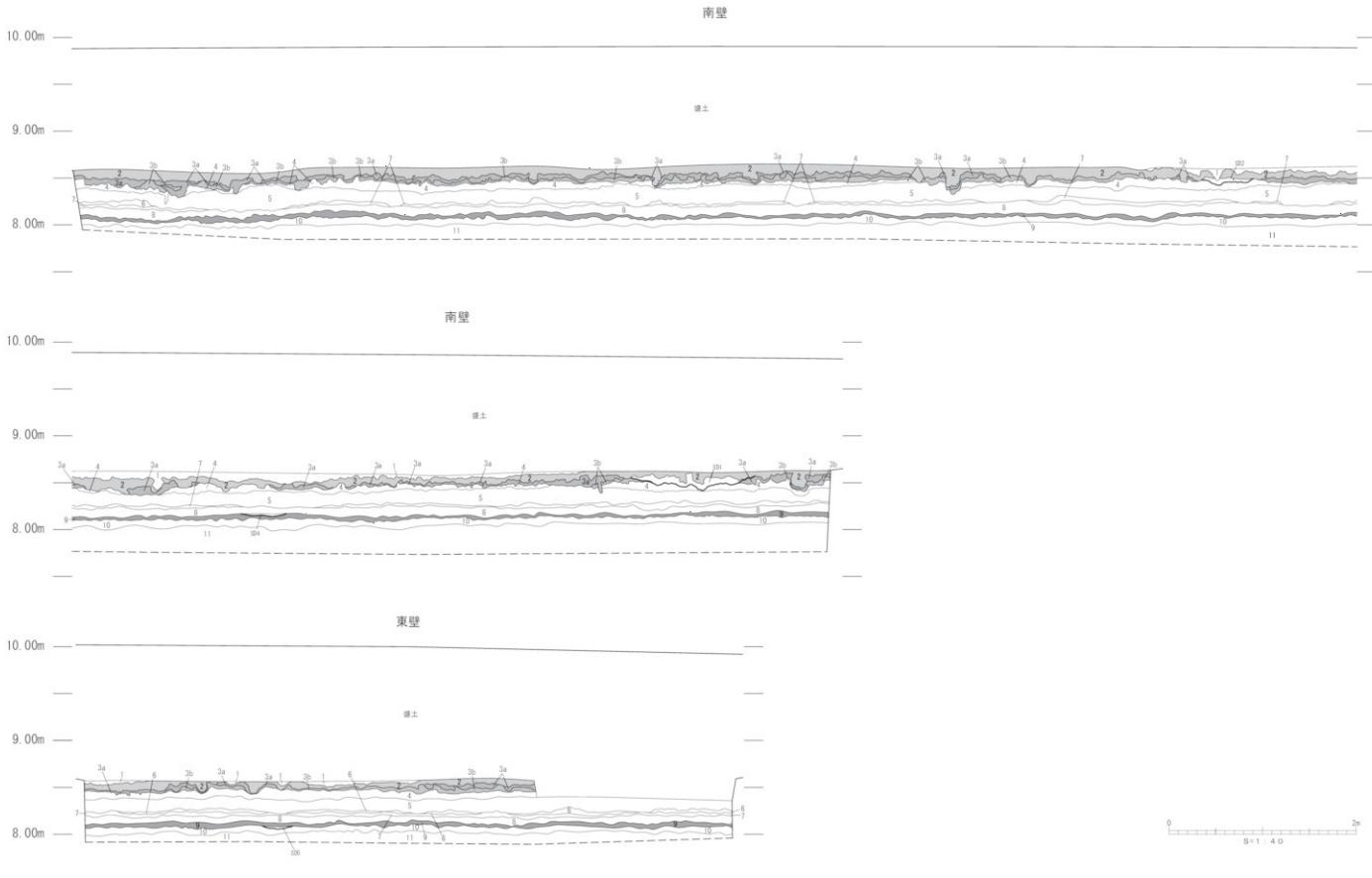
盛土層は約1.3mの厚さである。3a・3b層はどちらも植物遺体を多量に含む有機質な層で、腐食の程度と土壤化の差異、色調から細別し、3b層は調査区南側で部分的に確認された。周辺調査区との比較検討により、1層は現代の水田耕作土、2層は近世～近代、3a・3b層は古代～中世の水田耕作土と考えられる。4～8層は自然堆積層と考えられ、耕作土と比較して底面の起伏や上下の層が混在する様相は認められなかった。9層は第131次発掘調査10層と類似することから弥生時代中期の水田耕作土と推定される。10層是有機質の強い自然堆積土である。11層以下は、植物遺体を多量に含む粘土質シルトと粘土が互層に堆積し、安定した自然堆積層が22層まで約1.4m堆積していた。23層から下層は色調が明確に変化し、変色が著しいグライ化したシルトと粗砂が堆積していた。23層は灰色の砂質シルト層で、層が上下に乱れる。本調査区では磨石が1点出土しており、周辺調査区との比較から縄文時代早期の遺物包含層と推定される。24～26層はしまりの強いシルトを主体とするが、下層に下がるにつれて砂質が強まり、27層以下は砂を主体とする層に変化した。特に28層以下は27層と比較して堆積する砂の粒径が大きくなり、堆積層が上下に乱れる様相が認められる。本調査区北側に位置する第131次発掘調査とも異なる様相を呈していることが確認された。旧石器時代相当層は、湧水や壁面崩落等の理由から詳細な調査を行うことができず、確認できなかった。

層位	土質	土質	層厚(cm)	特徴	成因	時代
1 10YR 2/1	黒色	粘土	1~17	現代の水田耕作土。	水田耕作	現代
2 10Y 3/1	オリーブ褐色	粘土	1~18	下層に著しい起伏があり、複数される箇所が見られる。	水田耕作	近世～近代
3a 10Y 2/1	粘土質シルト	粘土	2~3	下層に起伏があり、2層からの耕作によって複数される。	水田耕作	古代～中世
3b 10YR 4/3	灰い黄褐色	粘土質シルト	1~2	3a層と比較して土壌化が弱く、非常に有機質な土質を呈する。	水田耕作	古代～中世
4 10YR 2/1	黒色	粘土	1~13	3b層に類似する黄褐色の有機質層が混在。	自然堆積	
5 25Y 2/1	黒色	粘土質シルト	7~25	層全体に黄褐色の土帶状に堆積。層下部に灰黃褐色土が堆積。	自然堆積	
6 25Y 6/2	灰褐色	粘土質シルト	1~5	やや赤褐色が7層と比較して明るい色調を呈し、調査区東側で薄く堆積。	自然堆積	
7 10YR 5/3	灰い黄褐色	粘土	1~7	8層に類似する黄褐色土層を少量含む。	自然堆積	
8 10YR 3/2	黒褐色	粘土	3~11	植物遺体が上部に多量に混在する。	自然堆積	
9 10YR 4/1	黒灰色	粘土	2~6	8~10層と比較してやや明るい色調を呈する。有機質の含有量が減少し、10層に類似する。黒色土粒を最下部に含む。	水田耕作	弥生時代中期
10 5Y 2/1	黒色	粘土	2~11	9層と比較して土質が暗い。	自然堆積	
11 25Y 3/1	黒褐色	粘土質シルト	11~28	11~19層にかけて有機質土と有機質層を含む有機質層。	自然堆積	
12 75Y 2/1	黒色	粘土質シルト	13~25	12~25層の間に有機質土層、黄褐色土との互層。	自然堆積	
13 25Y 5/2	黒褐色	粘土質シルト	0~3	13~25層の間に土粒を含み、部分的に複数される。	自然堆積	
14 25Y 3/1	黒褐色	粘土質シルト	5~11	有機質が混在し、土壌化する。	自然堆積	
15 25Y 5/1	黄褐色	粘土	1~4	14~16層と比較して軽度が暗い。	自然堆積	
16 10YR 2/1	黒色	粘土質シルト	10~16	有機質土の互層。暗い色調を呈する。	自然堆積	
17 10YR 3/3	灰い黄褐色	粘土質シルト	13~22	深褐色シルト土と灰褐色土が上部に堆積する。黒色の有機質土と互層。	自然堆積	
18 25Y 2/1	黒色	粘土質シルト	21~28	有機質の暗い互層。	自然堆積	
19 5Y 5/2	灰オリーブ色	粘土	1~3	黑色土層を含む。	自然堆積	
20 25Y 2/1	黒色	粘土質シルト	16~22	やや赤褐色、オリーブ色黒色土質土との互層。層下部は有機質が暗い。	自然堆積	
21 75Y 3/1	オリーブ色	粘土	1~3	やや明るい色調を呈する。	自然堆積	
22 75Y 2/1	黒色	砂質シルト	8~20	やや砂質が混入。	自然堆積	
23 5Y 4/1	灰褐色	砂質シルト	5~20	砂質多い。Φ1cm未満の黒色土粒とオリーブ色土粒を含む。	遺物含合層	縄文時代早期
24 75GY 8/1	明緑色	砂質シルト	6~20	Φ3mm程の白色砂粒、細かな砂、粗砂を含む。黒色有機質土を斜傾斜に含む。	自然堆積	
25 5GY 7/1	明オリーブ色	砂質シルト	20~49	Φ3mm程の白色砂粒、細かな砂、粗砂を含む。	自然堆積	
26 75GY 7/1	明緑色	砂質シルト	9~28	粗砂を帯状に含み、シルトと砂の互層。	自然堆積	
27 75GY 6/1	緑色	粗砂	11~24	粗砂が層全体に带状に堆積。	自然堆積	
28 5GY 7/1	明オリーブ色	粘土	0~17	より、粘性高い。灰褐色有機質土を斜傾斜に含み、下層に大きく入り込む。	自然堆積	
29 75GY 6/1	緑色	粗砂	27~66	繊維的な糸を含み、粗砂を帯状に含む。	自然堆積	
30 75GY 7/1	明緑色	砂質シルト	19~43	粘土の細かい砂を含むシルト層。	自然堆積	
31 75GY 5/1	緑色	粗砂	50~66	粗砂が層上部に堆積。	自然堆積	

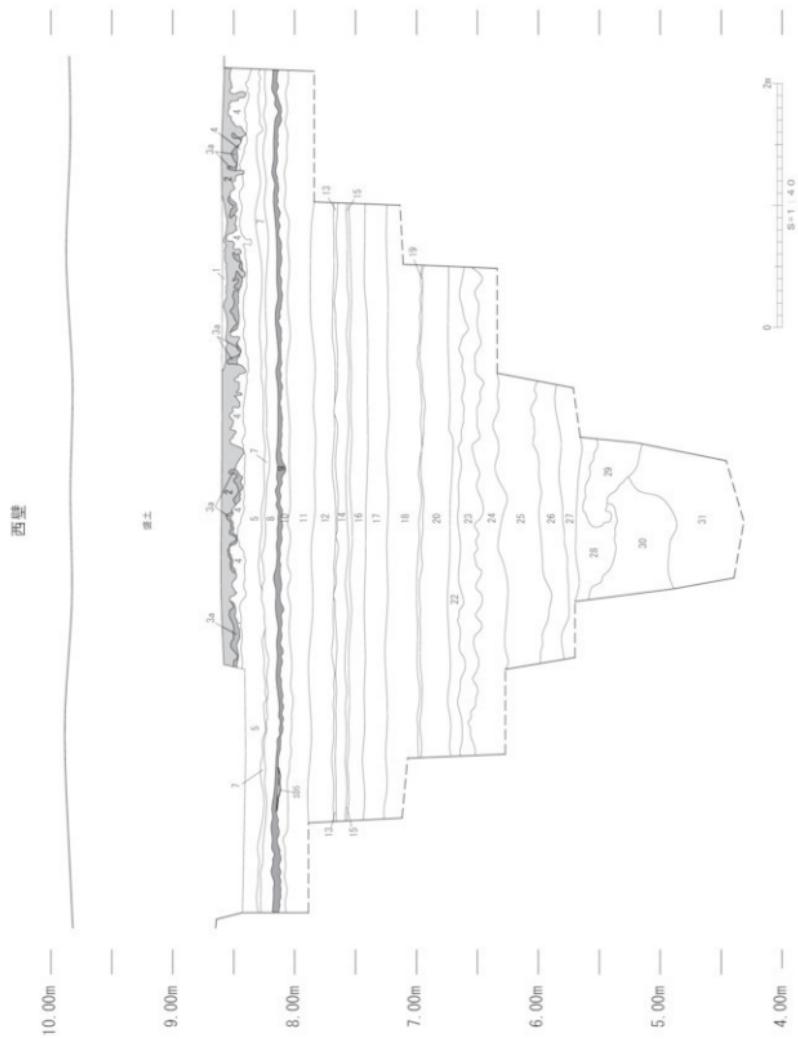
第1表 基本層序土層注記表



第7図 調査区北壁土層断面図



第8図 調査区南壁・東壁土層断面図



第9圖 調查區西壁上層斷面圖

第4章 検出遺構と出土遺物

第1節 2層

2層はオーリーブ黒色の粘土で、区画整理以前の耕作による擾拌を受けている。精査時に牛馬等による耕作とみられる痕跡が多数検出された。耕作の際に下層から巻き上げられた植物遺体を含んでおり、非常に乱れた様相を呈することから水田耕作土と考えられるが、層上部は1層に削平され、畦畔等は確認されなかった。出土遺物は、土師器、須恵器、陶器、磁器が出土しており、1点を国化した。第15図-1は擂鉢の片口部で、17世紀～18世紀のものとみられる。出土遺物から、2層の時期は近世後半以降から区画整理以前と考えられる。

第2節 3a・3b層上面

3a層は黒色、3b層にはぶい黄褐色の粘土質シルト層で、灰白色火山灰をブロック状に含む。土層観察から、3a・3b層は下部に起伏が認められ、水田耕作土と考えられるが、畦畔等は確認されなかった。調査区は西から東に向かって傾斜しており、西部で標高8.55m、東部で8.51mである。遺構は調査区西部でSD1を検出した。遺物は3a層から数点の土師器片や岸窯の香炉片（17世紀後半）が出土したが、いずれも小片のため國化しなかった。3a・3b層は2層の水田耕作の影響を強く受けしており、出土遺物は上層からの混在の可能性がある。周辺調査区との比較検討から、3a・3b層の時期は古代～中世と考えられる。

SD1溝跡 調査区西部に位置する南北方向の溝跡である。方向N-5°-Wである。検出長は6.10mで、さらに調査区外へ延びる。規模は上端幅0.80～1.30mで、深さ7～10cmである。断面形は浅い皿状を呈する。基本層2層に類似する有機質の強い褐色粘土を堆積土とすることから、2層の水田耕作に伴う耕作痕跡の可能性がある。遺物は出土しておらず、明確な時期は不明だが、堆積土の状況等から近世後半以降と考えられる。



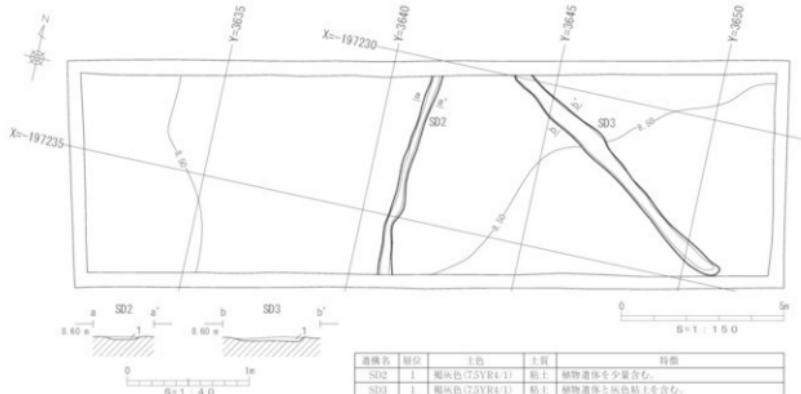
第10図 3a・3b層上面平面図 SD1断面図

第3節 4層上面

4層は黒色粘土で、調査区全体に堆積する自然堆積層である。調査面はほぼ水平で、西部で標高8.51m、東部で8.50mである。検出遺構にはSD2・3溝跡がある。

SD2溝跡 調査区中央部に位置する南北方向の溝跡である。方向は北半部でみるとN-3°-Eである。検出長は6.30mで、さらに調査区外へ延びる。規模は上端幅0.23~0.45mで、深さ2~4cmである。断面形は浅い皿状を呈する。堆積土は褐灰色粘土の単層である。遺物は出土しておらず、時期は不明だが、古代～中世と考えられる。

SD3溝跡 調査区東部に位置する北西～南東方向の溝跡である。方向はN-54°-Wである。検出長は8.70mで、さらに調査区外へ延びる。規模は上端幅0.37~0.70mで、深さ3~6cmである。断面形は浅い皿状を呈する。堆積土は褐灰色粘土の単層である。時期はSD2と同様に古代～中世と考えられる。



第11図 4層上面平面図 SD2・3断面図

第4節 9層上面

9層は灰色粘土層で、調査区全体に堆積する。底面に起伏が認められることから水田耕作土と考えられるが、畔等は検出されなかった。調査面は西から東に向かって傾斜しており、西部で標高8.20m、東部で8.15mである。調査区西部でSD4自然流跡を検出した。



第12図 9層上面平面図 SD4断面図

SD4自然流路跡 調査区西部に位置する北西～南東方向の自然流路跡である。方向はN-49°-Wである。検出長は7.60mで、さらに調査区外へ延びる。規模は上端幅0.40～0.60mで、深さ1～5cmである。断面形は浅い皿状を呈する。底面の傾斜は殆ど認められない。堆積土は、自然堆積層の8層に類似する黒褐色粘土の單層である。遺物は出土しておらず、時期は不明だが、9層の年代観から弥生時代以降と考えられる。

第5節 10層上面

10層は黒色粘土層で、調査区全体に堆積する。調査面は西から東に向かって傾斜しており、西部で標高8.15m、東部で8.10mである。自然流路跡とみられるSD5を検出した。

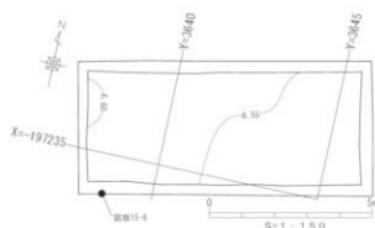
SD5自然流路跡 調査区を横断する南西～北東方向の自然流路跡である。方向は東部でみるとN-72°-Eである。検出長は21.5mで、さらに調査区外へ延びる。規模は上端幅0.30～0.45mで、深さ2～7cmである。断面形は浅い皿状を呈する。底面標高は西部では8.12m、東部では8.07mで、調査面と同じく西から東に向かって緩やかに傾斜している。堆積土は黒褐色粘土の單層で、東半部では灰黄褐色シルトが薄く堆積する。調査区中央部から東部にかけては直線的に延びるが、西部では蛇行することから、自然流路跡と考えられる。遺物は出土しておらず、時期は不明だが、9層の年代観から弥生時代中期以前と考えられる。



第13図 10層上面平面図 SD5断面図

第6節 23層

23層はグライ化の著しい灰色砂質シルト層である。遺構は確認されなかったが、調査区南西部で磨石1点が出土した。本調査区の北側に位置する第131次発掘調査区の23層からは磨滅した石片が出土しており、縄文時代早期の遺物包含層の可能性が指摘されている。本層についても同様の時期の可能性がある。



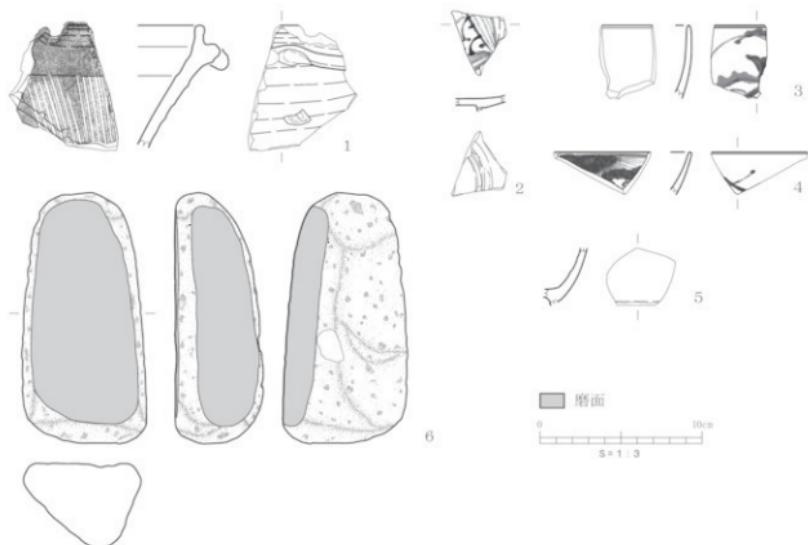
第14図 23層下面平面図

第7節 24層以下

24・25層は粘土が主体となるが、26層は層全体に細砂を帶状に含み、27層は粗砂を主体とする砂質層に変化した。特に28層から下層は、部分的に粘土が混在するが、安定した層状の堆積は認められず、上下の層が混在する非常に乱れた層が確認された。調査は31層まで掘削したが、湧水や壁面の崩落等の理由から、旧石器時代の遺物を包含する腐食粘土層の確認はできなかった。

第8節 出土遺物

本調査では、須恵器、土師器、陶器、磁器、石器が出土した。出土総点数は59点で、盛土からの出土が大部分を占める。2層で擂鉢1点、23層で磨石1点、盛土層で陶器1点、磁器3点を図示した。



国版番号	登録番号	種類	器種	遺構・部位	法量(cm)			産地	時期	備考	写真図版
					長	幅	厚				
1	12	須恵器	瓶	2層	—	—	—	不明	17c~18c	須貝7本・頸26cm	2-5-1
2	11	須恵器	瓶	3層	—	(6.0)	—	大根相馬	19前半	須恵丸文	2-5-2
3	14	須恵器	瓶	3層	—	—	—	須佐見	18前半	須付单面文(らわん)手	2-5-3
4	11	須恵器	瓶	3層	(14.0)	—	—	肥前	18c前4期	須付内面松文外面芭蕉文	2-5-3
5	12	須恵器	伝丸瓶	3層	—	—	—	須佐見	18c後半	青磁	2-5-5
—	13	須恵器	大鉢小	3層	—	—	—	肥前	18c後半	須付外面芭蕉草文	2-5-6
6					法量(cm ² /g)			石器		備考	写真図版
6	K1	摩石器	磨石	22層	15.4	7.2	5.4	861	流紋岩	磨削面	2-5-7

第15図 出土遺物実測図

第5章　まとめ

調査の結果、2層、3a・3b層、9層が水田耕作土層と考えられた。これらは弥生時代から近世にかけての水田耕作土と推測されるが、遺物の出土が少量であったため、明確な時期は不明である。また、下層の調査では、23層で遺物を確認した。以下に各層の成果を、周辺調査区と比較し概観する。

1. 2層は第131次発掘調査2層に類似し、近世後半以降から区画整理以前に営まれた水田耕作土と考えられる。上層の水田耕作により削平を受け、畦畔は確認できなかった。遺物は17c以降の陶磁器の小片が少量出土した。
2. 3層は廻植土の土壤化の程度によって細別される。下面の起伏から水田耕作土と推定される。上層の水田耕作により上面を削平され、畦畔は確認できなかった。3a・3b層上面では、南北方向のSD1溝跡を検出した。遺物は3a層から17c後半頃の遺物が出土しているが、上層からの混入の可能性がある。
3. 9層は、下面の起伏と堆積土の特徴から水田耕作土と考えられるが、畦畔は確認できなかった。遺物が出土していないため、明確な時期は不明だが、周辺調査との上層比較により、第131次発掘調査10層に対応するとみられ、弥生時代中期頃と推定される。
4. 23層からは磨石が1点出土した。本層は第131次発掘調査23層及び第74次発掘調査30層・第81次発掘調査32層に対応し、第28次発掘調査等で確認されている縄文時代早期の遺物包含層に相当するとみられる。
5. 24層以下の調査では、標高約4.5mまで掘削したが、涌水・壁面崩落等の理由から第131次発掘調査で検出した旧石器時代の腐食粘土層を確認することはできなかった。

引用・参考文献

- 古環境研究所 1990 「テフラ組成分析」『赤津遺跡発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第139集
- 仙台市教育委員会 1987 「富沢遺跡第15次発掘調査報告書」仙台市文化財調査報告書第98集
- 仙台市教育委員会 1992 「富沢遺跡第30次発掘調査報告書Ⅱ 旧石器時代編」仙台市文化財調査報告書第160集
- 仙台市教育委員会 1993 「第2章 調査結果 第2節 富沢遺跡80次調査・第3節 富沢遺跡81次調査」「富沢・泉崎浦・山口道路(5)」
仙台市文化財調査報告書 第171集
- 仙台市教育委員会 1999 「富沢遺跡第104次調査報告書」仙台市文化財調査報告書 第235集
- 仙台市教育委員会 2004 「富沢遺跡第131次調査報告書」仙台市文化財調査報告書 第276集
- 仙台市教育委員会 2007 「富沢遺跡第138次調査報告書」仙台市文化財調査報告書 第313集
- 仙台市教育委員会 2008 「富沢遺跡第140次調査報告書」仙台市文化財調査報告書 第317集
- 仙台市教育委員会 2011 「富沢遺跡第145次調査報告書」仙台市文化財調査報告書 第382集
- 仙台市教育委員会 2012 「第3章 富沢遺跡第143次調査報告書」「郡山遺跡発掘調査報告書」仙台市文化財調査報告書 第405集
- 仙台市教育委員会 2014 「富沢遺跡第147次調査報告書」仙台市文化財調査報告書 第426集
- 仙台市史編纂委員会 1994 「仙台市史 特別編1 自然」仙台市
- 仙台市史編纂委員会 1995 「仙台市史 特別編2 考古資料」仙台市
- 卓野裕彦 2003 「富沢遺跡第30次調査―旧石器時代の湿地林」「環境考古学マニュアル」同成社
- 卓野裕彦 2015 「富沢遺跡」同成社
- 山田一郎・庄子真雄 1980 「宮城県に分布する灰白色火山灰について」『宮城県多賀城跡調査研究年報1980』宮城県多賀城跡調査研究所



1. 調査区北側壁面（南西から）



2. 調査区全景（東から）



3. S D 1 完掘状況（北から）



4. 4層上面完掘状況（北東から）



5. 9層上面完掘状況（西から）



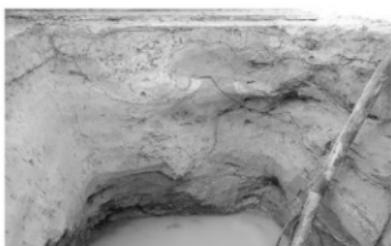
1. 10層上面実掘状況（東から）



2. 23層磨石出土状況（北から）



3. 下層掘削状況（南西から）



4. 下層西侧壁面状況（東から）



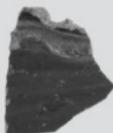
1 (第15図3)



2 (第15図2)



3 (第15図4)



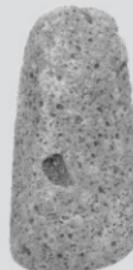
4 (第15図1)



6



5 (第15図5)



7 (第15図6)

5. 出土遺物

S = 約1/3

報告書抄録

ふりがな	とみざわいせき						
書名	富沢遺跡						
副書名	第149次発掘調査報告書						
シリーズ名	仙台市文化財調査報告書						
シリーズ番号	第453集						
編集著者名	佐藤淳、小泉博明、堤正樹、山崎貴之						
編集機関	仙台市教育委員会						
所在地	〒980-8671 宮城県仙台市青葉区上杉1-5-12 電話 022-214-8899						
発行年月日	2017年1月31日						
ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所 在 地	コード 市町村	北緯 遺跡番号	東経	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因
富沢遺跡 第149次	仙台市太白区 長町南3丁目 6-1	141009	1369	38° 13' 23"	140° 52' 29"	20160822～ 20161029	154 共同住宅建設
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項	
富沢遺跡 第149次	水田跡 包含地	旧石器時代～ 近世	水田跡・溝跡・ 自然流路跡	土師器・須恵器・陶器・ 磁器・石器			
要 約	<p>富沢遺跡は名取川及び広瀬川によって形成された沖積平野の後背湿地に立地する。調査の結果、基本層2・3a・3b層、9層を水田土壤とする水田跡と、基本層3a層、4層、9層、10層上面で溝跡と自然流路跡を検出した。周辺調査区の基本層序との対応関係から、確認された水田跡の時期は古代～近世のものと、弥生時代中期頃のものと考えられる。</p> <p>基本層23層の調査では、磨石が出土したことから縄文時代早期の遺物包含層と考えられる。旧石器時代の遺物を包含する層は確認できなかった。</p>						

仙台市文化財調査報告書第453集

富 沢 遺 跡

第149次発掘調査報告書

2017年1月

発行 仙 台 市 教 育 委 員 会
宮城県仙台市青葉区上杉1-5-12
文化財課 TEL 022(214) 8899

印刷 株式会社 東 北 プ リ ン ト
宮城県仙台市青葉区立町24-24
022-263-1166

